

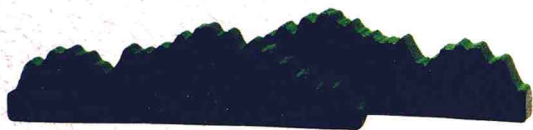
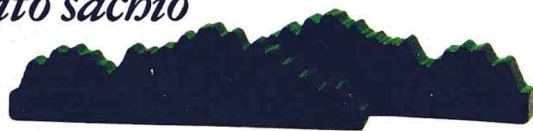
少年少女
日本文学館

3



ふるさと・野菊の墓 はか

furusato shimazaki tōson
nogikunohaka itō sachio



島崎藤村 しまざきとうむら
国木田独歩 くにぎだひとふ
伊藤左千夫 いとうさちう

少年少女
日本文学館

③

ふるさと・野菊の墓

島崎藤村 国木田独步 伊藤左千夫

講談社

少年少女日本文学館

第三卷

ふるさと・野菊の墓

定価 一四四〇円
(本体 一三九八円)

一九八七年 一月 十四日 第一刷発行
一九九〇年 二月 十二日 第五刷発行

著者……………島崎藤村 国木田独步 伊藤左千夫

発行者……………野間佐和子

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一一 (大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

©島崎翁助 一九八七年

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。なおこの本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

Printed in Japan

ISBN4-06-188253-8

(児一)

も
く
じ



島崎藤村
しまざきとうぞん

ふるさと

の
伸び支度
じたく

122

9

国木田独歩
くにきだどっぽ

鹿狩
しかがり

忘れえぬ人々
わすれえぬひとびと

157

139



伊藤左千夫
いとうさちお

野菊の墓
のぎくのはか

181

● 解説
かいせつ

猪野謙二
いののけんじ

258

● 随筆
ずいひつ

黒井千次
くろいせんじ

266

● 略年譜
りやくねんぷ

272



◆この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りがなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

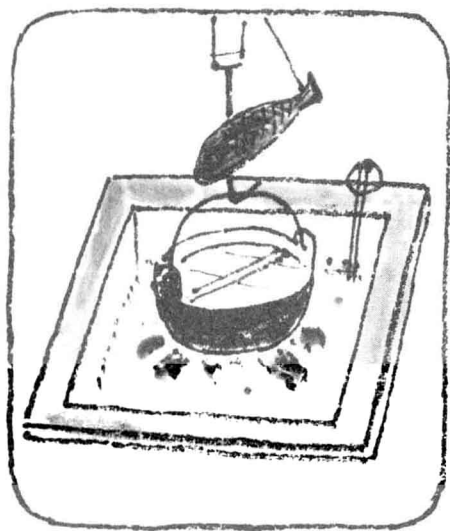
ふるさと

・
野菊^{のぎく}
の墓^{はか}



島崎藤村

ふるさと
の
伸び支度



ふるさと

はしがき

父^{とう}さんが遠^{とほ}い外国^{がいこく}の方^{ほう}から帰^{かえ}った時^{とき}、太^た郎^{ろう}や次^じ郎^{ろう}への土^{みやげ}産^{ばなし}話^わにと思^{おも}いまして、いろいろな旅^{たび}のお話^{はなし}をま^はとめたのが、父^{とう}さんの「幼^{おきな}きもの^に」で^でした。あ^あの時^{とき}、太^た郎^{ろう}はようやく十三^{さい}歳^{さい}、次^じ郎^{ろう}は十一^{さい}歳^{さい}で^でした。

早^{はや}いもので^ですね。あ^あの本^{ほん}を作^{つく}った時^{とき}から、もう三年^{ねん}の月^{つき}日^ひがた^たちます。太^た郎^{ろう}は十六^{さい}歳^{さい}、次^じ郎^{ろう}は十四^{さい}歳^{さい}にも^もなり^ります。父^{とう}さん^の家^{うち}には、今^{いま}、太^た郎^{ろう}に、次^じ郎^{ろう}に、末^{すえ}子^この三^{にん}人^{にん}が^がい^いま^ます。末^{すえ}子^こは母^かさ^あんが亡^なくなると間^まもなく常^ひ陸^{たち}の方^{ほう}の乳^い母^ぼの^ち家^{うち}に預^{あず}け^けら^られて、七^{しち}年^{ねん}もそ^その乳^い母^ぼの^ちと^とこ^ころに^にい^いま^ました^たが、今^{いま}では父^{とう}さん^の家^{うち}の方^{ほう}へ帰^{かえ}つて来^きて^てい^いま^ます。三^{さん}郎^{らう}はもう長^{なが}いこ^こと信^{しん}州^{しゅう}木^き曾^その^{（一二ページ）}小^お父^じさん^の家^{うち}に

養やしなわ（育てられ）れていまして、兄あにの太た郎ろうや次じ郎ろうのところへ時々ときどきお手紙てがみなぞをよこすようになりました。三さ郎ろう

はことし十三さい歳さい、末すえこ子こがもう十一さい歳さいにもなりますよ。

父とうさんの家うちではよく三さ郎ろうの噂うわさをします。三さ郎ろうがきる木き曾その方ほうの話はなしもよく出でます。あきの木き曾その山やまの中なかが父とうさんの生うまれなたところなんですから。

人ひとはいくつになつても子こ供どもの時じ分ぶんに食たべた物ものの味あじを忘わすれないように、自じ分ぶんの生うまれなた土ど地ちのこわすれなないものなです。たとえその土と地ちが、どんやまな山なかの中なかでありましても。そこで今こん度ど、父とうさんは自じ分ぶんの幼ちい少さいい時じ分ぶんのことや、その子こ供どもの時じ分ぶんに遊あそび廻まわつた山やまや林はやしのお話はなしを一さつ冊ちいのほん小こさな本ほんに作つくろうと思おもい立たちました。あおの「幼おきものな」と同おなじように、今こん度どの本ほんも太た郎ろうや次じ郎ろうなどに話はなし聞きかせるつもりで書かきました。それがこの「ふるさと」です。

一 雀のおやど

みんなおいで。お話ししましょう。まず雀のおやどから始めましょう。

雀、雀、おやどはどこだ。

雀のお家は林の奥の竹やぶにありました。この雀には父さまも母さまもありました。楽しいお家の前は竹ばかりで、青いまっすぐな竹がたくさんに並んで生えていました。雀は毎日のように竹やぶに出て遊びましたが、その竹の間から見ると、楽しいお家がよけいに楽しく見えました。そのうちに、雀の好きなお家の前には竹の子が生えてきました。母さまのお洗濯する方へ行ってみますと、そこにも竹の子が出てきていました。

「あそこにも竹の子。ここにも竹の子。」

と雀はチュウチュウ鳴きながら、竹の子のまわりを悦んで踊って歩きました。

僅か一晚ばかりのうちに竹の子はずんずん大きくなりました。雀が寝て起きて、また竹やぶへ遊びに行きますと、きのうまで見えなかったところに新しい竹の子の出てきたのがあります。きのうまで小さな竹の子だと思ったのが、僅か一晚ばかりで、びっくりするほど大きくなったのが

信州 木曾(九ページ)

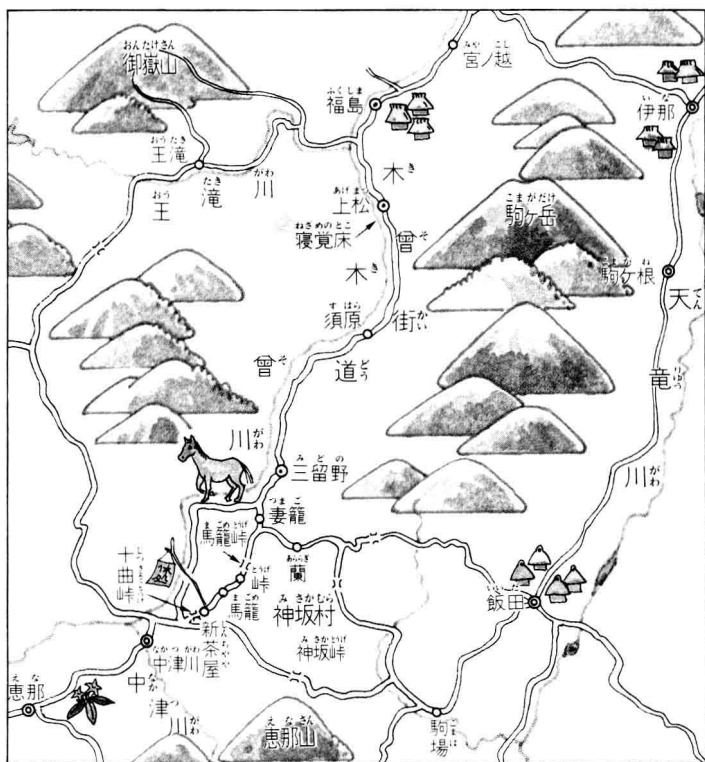
今の長野県木曾地方。ひのきなどの天然の美林は国有林であり、寝覚床などの渓谷美も多い。

榎

ひのき科の常緑高木。

榎

ひのき科の常緑高木。



榎木

ひのき科の常緑高木。
日本特産。

明榎

ひのき科の常緑高木。
あすなるともいう。

榎

すぎ科の常緑高木。
日本特産。

榎

にれ科の落葉高木。



あります。

雀すずめはおどろいて、母かあさまのところへ飛とんで行いきました。母かあさまにその話はなしをして、どうしてあの小さな竹たけの子がぁんなに急に大おおきくなつたのでしょうと尋たずねました。すると母かあさまは可愛かわいい雀すずめを抱だきまして、

「お前は初はじめて知しつたのかい、それが皆みなさんのよく言いう『いのち』(生命せいめい)というものですよ。お前まえたちが大おおきくなるのもみんなその力ちからなんですよ。」と話はなしてきかせました。

二 五木ごぼくの林はやし

太郎たろうよ、次郎じろうよ、お前達まえたちは父とうさんの生うまれた山さん地ちの方ほうのお話はなしを聞ききたいと思おもいますか。

檜木*ひのき、樅*さくら、榧*あすひ、明檜*まき、榎*ねず——それを木會きその方ほうでは五木ごぼくといまして、そういう木きの生はえた森もりや

林はやしがぁの深い谷間たにあいに茂しげっているのです。五木ごぼくとは、五つの主おもな木きを指さして言いうのですが、まだそ

の他ほかに栗くりの木き、杉すぎの木き、松まつの木き、桂かつらの木き、欒*けやきの木きなどが生はえています。樅もみの木き、梅つがの木きも生はえて

います。それから栃とちの木き(*とちのき科の落葉高木)も生はえています。太郎たろうや次郎じろうは一度父とうさんに随ついて、三郎さぶろうのいる木會きその

小父おじさんの家うちを訪たずねたことがありましたろう。あの小父おじさんの家うちの前まえから、木曾川きそがわの流れながるところを見て来きましたろう。小父おじさんの家うちのある木曾福島町きそふしまちは御嶽山おんたけさんに近いところですが、あれから木曾川きそがわについて十里り「十里は約四キロメートル」ばかりも川下かわしもに神坂村みかさむらという村むらがあります。それが父とうさんの生うまれた村むらです。

三 山やまの中なかへ来くるお正月しょうがつ

父とうさんも昔むかしはお前達まえたちと同じように、お正月しょうがつの来くるのを楽たのしみにした子供こどもでしたよ。

お正月しょうがつが来くる時じ分ぶんになると、父とうさんの生うまれたお家うちでは自分じぶんのところでお餅もちをつきました。そのお餅もちは炉边ろばたにつづいた庭にわでつきましたから、そこへ爺じいやが小屋こやから杵きねをかついで来きました。臼うすもころがして来きました。お餅もちにするお米こめは裏口うらくちの竈かまどで蒸むしましたから、そこへも手伝てづだいのお婆ばあさんが来きて楽しい火ひを焚たきました。

やがて蒸籠＊せいろうというものに入いれて蒸むしたお米こめがやわらかくなりますと、お婆ばあさんがそれを臼うすの中なかへうつします。爺じいやは杵きねでもって、それをつき始はじめます。だんだんお米こめがねばってきて、お餅もちが臼うすの中なかから生うまれてきます。爺じいやは力ちから一いつぱい杵きねを振り上あげて、それを打ちおろす度たびに、臼うすの中なかのお餅もちには大きな穴あながあきました。お婆ばあさんはまた腰こしを振りながら、爺じいやが杵きねを振り上あげた時ときを見